

アメリカ再訪記

金沢大学長 豊田 文一

目

- バッファロー、ペンシルベニア大学の視察
1. バッファロー大学
 2. ペンシルベニア大学
- アメリカの農業雑録
1. フレドニア
 2. デンバー
 3. カリフォルニア大学農学部

次

- アメリカこぼればなし
1. 大陸一人旅
 2. 山火事
 3. こじき
 4. 9月半ばに雪が降る
 5. ガレッヂ・セール
 6. インターナショナル・ボーダー
 7. 物価について

昨年9月、アメリカの中西部ソルト・レーク・シティにおいて第7回国際農村医学会議が開催され、本県から林脩院長、越山健二院長も参加された。私は1974年、姉妹校であるバッファロー、ペンシルベニア大学を訪ねたのであるが、今度も学術交流についての打ち合わせと、彼の地の友人、知己との旧交を暖める意味もあり、先行したわけである。それは、今回国際会議の他に両大学の管理運営についての調査、それに医学方面の交見、さらにアメリカの農村の実態を把握する積りであった。しかし出張期間の制約もあり、最初計画していた目的は、必ずしも十分達しえられなかったが、アメリカ再訪の印象の一端をここにしたい。なお国際会議については、林、越山両院長が報告されていると思うので、これを割愛する。

バッファロー、ペンシルベニア大学の視察

昨年9月10日より15日にわたって、金沢大学の姉妹校である両大学を訪問し、学長および関係の人々と懇談の機会をえた。もちろん短時日であり、その全貌については、到底把

握することができなかつたが、その印象について述べてみたい。

1. バッファロー大学

1974年6月、金沢においてバッファロー大学と姉妹校の締結調印を終えて、9月学術交流の細部の取り決めのため、同大学を訪問して5年目になる。幸いに学術交流も頻繁に行われ、知己友人も多く、それぞれの人々と旧交を暖めたかったが、大学では公式の行事が多く組まれ、過密な日程で市内の視察は全くできなかった。

バッファロー大学はニューヨーク州立であり、アメリカでも名の知られている大学である。学生数2万5千、教職員2万4千で、日本では私立大学は別として国立大学の最高でも1万5千を超えない。なおアメリカでは国立大学は、陸海空軍の学校と商船大学のみで、高等教育は、私立と州立のみである。恐らく文教政策の国家統制の排除の現われでないだろうか。しかしその反面、日本の国立大学のように国の予算で運営されるのと異なり、州立といえども、この大学の年間予算1億6千万

ドルのうち州から配分されるのは1億6百万ドル、その足りない分5千4百万ドルは大学自身でまかなわねばならない。不足の大部分は授業料と寄附金に頼る。寄附金は卒業生のものが主である。学長の鼎の軽重は財政を如何によくやってゆくかによって決まる。何分にも10人余りの副学長は、それぞれの部門での管理にあたっているので、学長は大学運営の大方針さえ示唆すれば、その方面の心配はいらない。この大学に「Good Year Hall」というすばらしい10階位の大学会館ともいえる建物がある。大学の各種の行事も行えるし、賓客の接待用にも使われる。それにこの中には学生寄宿舎も含まれ、厚生のな附属施設もある。実に膨大なものである。この前訪れた時も大学としての私の歓迎会はここで開かれたが、「Good Year」という名称は、恐らく新しい年を祝って名付けられたものであろうと考えていたが、これは人名で、Good Year氏によって寄附されたものと聞き一驚した。実は他の大学でも「Good Year」という名を冠した施設があり、個人としての育英に対する熱意の程がうかがわれた。

私は、ケツター学長との懇談のうちで、財政不足は判るが、寄附金のみでまかなえないだろうと聞くと、それのみでは不可能で、学生数をふやし、授業料の値上げで収支を償わざるをえないと答える。一般にアメリカの大学は「入るは易く、出るは難し」といわれるように低学年程学生数が多く、成績不良のものはどんどん退学させる。だから学生数は三角形を画いていた。しかし今は逆三角形で高学年が多い。というのは編入学で、他大学からの入学志望者もとり入れ、成績によって高学年へ飛びこし入学をさせる。また授業料は、医学部5,500ドル、法学部2,500ドル、その他の学部は1,200ドル、これも逐次値上げをするつもりらしい。仮に1,200ドルにして、2万5千名の学生からの収入は300万ドル、これだけでは経常経費不足に遙かに及ばない。あとは寄附

金に頼るしか他はない。ことに新規施設は、大学の手でやらねばならないので、腐心のあとがうかがわれる。

バッファロー大学は、数年間を要して、アムハースト地区に総合移転を行い、ほぼ完成した。旧キャンパスは200エーカー(81万㎡)新キャンパスは1,200エーカー(486万㎡)、ただし健康科学部(医、歯、薬、看、医技学科など)は旧キャンパスに残る。1974年訪問したとき、何故移るのか質したのに対し、パーキングが狭隘で、車を入れる余裕のないことを第一にあげ、次いで将来の拡充整備の望めないことも理由である由。

話は別になるが、この大学の総合移転は各国にみられ、私が歩いた範囲でも、ナンシー、レーゲンスブルグ、レニングラード、イルクーツク、サンパウロも広大な土地を求めて移転し、あるいは移転しつつあった。その理由はバッファローと軌を一にしている。

それはそれとして、アメリカ並びに上記の国も、恐らく荒蕪地、または未使用地があり容易に土地を求めることができるし、その対価はタダ同然であろう。

さて学術交流の点であるが、学生の留学は最近では毎年出ているし、研究者も2、3名は行っている。ただ近頃経済状況の悪化は、研究基金にもしわよせがきている。もともと大学の研究は、外部からの基金に大きなウェイトがあり、研究の直接の資金はもとより、研究員と職員の給与は入手した基金でまかなわれる。だから基金がえられなければ、研究不能となり、協力する人達も解雇されることになる。だから安易な気持ちでその職に止まっているわけにはゆかない。ロスアンジェルス市のシテイ・オブ・ホープ・メディカル・センターで研究者と話し合ったとき、一つの課題は大体5年間継続で基金が入る、その期限の2年前に次のテーマを選定して基金の申請をする。そうしないと5年毎にブランクができ研究を停止せねばならない破目になる。日本

の大学の教官とちがい、あちらでは5年間契約制であるので研究実績、成果がなければ契約解除ということになる。バツファロー大学でも財政の逼迫もあり、かなりの数の教官が大学を去らざるをえなかったと聞く。今度の訪問で、かつて金沢大学で講演をお願いしたノーベル賞を受けられた大脳生理学のエックルス教授にもお会いしたかったが、教授はすでにオランダの大学からの招へいで去られ残念であった。もう年齢はすでに80才近いと思われるが、この大学では停年制はなく、優秀な人材は、たとえ老令といえどもいつまでも残って貢献してもらいたいというのは、能力至上のかの国の考え方的一端とも思える。

ペンシルベニア大学も同様、ここでは公式訪問であり、かつ3泊4日の滞りで、農村とフレドニヤの学園都市の視察で1日とられ、過密スケジュールで、市内の見学もできず、大学のはからいでナイアガラ水力発電所の視察と金沢市との都市提携委員会の人々との会談のみであわただしい日程を消化してフィラデルフィアに向った。

2. ペンシルベニア大学

ペンシルベニア大学（ペン大略す）と本学の姉妹校の提携は1956年である。以来20数年間、研究者はもとより、学生の留学も引き続いている。私は1974年ここを訪ねた時、マイヤーソン学長は、サンジェゴに出張だったが、私のために一時帰学し、最大の好意を示してくれたことは忘れえない。また東洋史のコンロイ教授は、本学との交流の窓口となって派遣留学学生の身辺までの世話をされており真からの日本好きである。それも娘さんが日本人と結婚し、現在カリフォルニアに勤務されているとのことだが、千葉に住宅もあると聞いた。幸いに日本語も通ずるので、私自身心強い限りであった。

この大学は私立で、初代学長はベンジャミン・フランクリン、アメリカ独立宣言の由緒

ある土地柄でもあり、大学の伝統は高く評価されている。キャンパスはフィラデルフィア中央駅の近くにあり、いわば市街地のなかの一面を占めている。従って狭隘な感じがし、建物がたてこんでいる。構内はかつて市電も走っており、今は名残りの線路だけが残されており、見るものに郷愁をただよわせしめる。キャンパス内では車をほとんど見かけず奇異な感を懐かしめる。恐らく各道路は車の通行禁止が行われているらしく、公用車などを除き制限が実施されている模様である。

私の日程は2泊3日だったので、スケジュールは秒刻みに計画されており、マイヤーソン学長とコンロイ教授との懇談以外はすべて医学部関係の視察ということになっていた。だから大学全般を把握できず残念であった。到着の夜、医学部長の招宴、翌晩は学長のレセプションが、学長邸で行われた。

医学部長の招宴は、折角日本から来たのだからという意味でもあったのだろう、City Tavern というレストラン、Tavern というのは居酒屋の意味をもつもので、開拓時代の面影を残した建物で、ホステス、ホストは当時の服装そのままである。この懐古調はフィラデルフィアの名物でもあるらしい。医学部長他10数名の教授が出席していたが、懇談の第一声は向こうから放たれた。それは日本の自治医科大学への質問である。私自身、アメリカでこれ程自治医大に対する関心があるとは想像もしなかった。最も大きな疑問は、この卒業生が卒業後果たして命ぜられるまま僻地のような所へ行くだろうか。いわば強制的に任地へ行く、この措置は医師という自由業、かつ基本的人権を無視した考え方、果たしてその人達が従うだろうか。私はこれに対し私の知る範囲で、自治医大の成立の過程と設立目的、さらに地方自治体の協力の模様などを話したが、どうも納得し兼ねるように見受けられた。このような話をとくに持ち出してくることは、アメリカの医学関係者が、僻地

医療の打開策に腐心している一端ともうかがえる。

アメリカの医師数は人口10万対165(1977)、日本では129.8(1977、推計)、かの地では極度に都市集中している。従って僻地での医師数は微々と言ってよい。しかしその対策は打ち立てられていない。これについて政府も頭を悩まし、ケネディ大統領当時、僻地医療のための国立医科大学の設立を企図したが、医師という自由業は何物にも拘束されてはならないとアメリカ医師協会の猛反対にあって挫折したままになっている。しかしこの広大な国土に無数の僻地があり、現状では看護婦、保健婦、療術師などの技術者に医療行為が委ねられている。

翌日ペン大附属病院を視察したが、この病院の入院患者の平均入院日数9.5日、余りにも短いのに驚かされた。例えば内科13.0日、胸部外科13.0日、整形外科12.9日、脳神経外科11.0日、精神科63.4日、その他の科は10日以内である。一つ考えられるのは1日の入院科5万円、一般庶民ではそう長く入院しておられないのではないだろうか。こんなに早く退院させて患者の予後はどうかといふかりながら聞くと、退院後は医師の処方により地域看護に委ねる。ここで特徴的なことはボランティア活動の盛んなことで、病院内はもとより地域においても極めて活発で、これらの退院患者の世話も、この活動による所が多いと思われる。

附属病院が今年一つ増設されたからこの新しい病院を見ていってくれとのことである。“Silver Stein Hospital 1978”と門標に刻まれている。ペン大附属病院ならわかるが、この文字の意味を尋ねた。これはSilver Stein氏の寄附によるもので、基礎医学の部門まで附設されている。最近の日本の新設医科大学は、建物、設備を含めて300億円を要すると聞いている。日本人的感覚では気が遠くなる。先にも触れたがアメリカの大学財政

は寄附行為により支えられるところが多い。これは遺産相続の場合、大部分税にもってゆかれる。それで免税である大学へ寄附することが多く、高額相続であれば尚更である。私はこのあとロスアンジェルスシティ・オブ・ホープ・メディカル・センターを訪ねたとき、院内の小公園に、日本のお寺で見る祠堂札のように銅板が並び立っている。それには寄附者の名が刻みこんである。案内してくれた人に聞くと、1万ドル以上の寄附でないところに刻みこまない、何百もこれが見られ、アメリカの病院は人々の善意によって成り立っていると、その感を深くした。

このSilver Stein Hospitalと附属小児病院は境を接して並んでいる。ここで珍しかったのは、私の泊ったヒルトン・ホテルと廊下伝いに病院に通ずることである。私も諸外国の病院を数多くみたが、ホテルと病院が直結していたのは初めてである。アメリカの病院は付き添いはない。隣の小児病院へ親が時々見舞いに行くために、至近距離で、廊下伝いで、まことに都合よくなっている。しかもホテルの敷地は大学の所有地で、大学自体の配慮もあったのではなかろうか。

なお、アメリカでは大学医学部、医科大学は、その数110位と聞かされた。そのうち附属病院のあるものは50、ないものは60、だから半数以上は附属病院をもたない。ペン大は、新旧併せて1,500床、その他に教育関連病院がある。バツファロー大学は附属病院をもたない。学生の臨床実習は教育関連病院5カ所で、約3,000床利用している。指導教官は教授であっても関連病院から俸給をもらっている場合、大学から支給されない。大学教授という誇りだけで無給である。ペン大の場合、教授、助教授はプライベートの診察室と患者をもっている。その診療報酬はそれぞれの人の収入になる。しかしそれに関与する人々の手当、材料などは、勿論教授、助教授が支払わねばならないことは当然である。この在り

方は西欧も同様であり、先般ナンシーのある教授が私のもとを訪れたとき、その教授のプライベートのベットは2つしかないと嘆いていた。ペン大病院へは朝8時頃行ったが、教授はすでに手術室に入っていた。

以上公式に訪問した両大学で見聞した概要である。その印象を記録として止める次第である。

なおその他ニューヨーク州立フレドニヤ大学、コロラド州立ボルダー大学、この両大学は共に学園都市で、大学を中心にして都市造りがなされ興味深く見学した。さらにロス・アンジェルスでは、シティ・オブ・ポーブ・メディカルセンター、ランチョー・ロス・アマigos・リハビリセンターも視察したが、紙面の都合で、次の機会に譲って割愛する。

アメリカの農業雑録

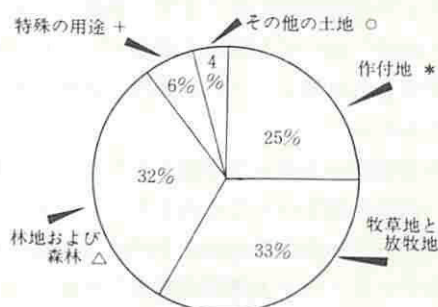
アメリカの農業は18世紀末から産業としての形態が整い始めた。それはヨーロッパの産業革命、ことにイギリスの綿工業を基軸とする資本主義が、資本と生産手段と労働力を持ちこみ、その利潤を積極的に吸収しつつ開拓してきたものである。つまりアメリカの農業はヨーロッパ工業が自ら創り出した農業地域であるという意義を有している。この新大陸は、ヨーロッパの資源基地として形成され、その形態は南部と北部に異なる構造をもち、南部では綿花、煙草などの輸出向け商品生産を主とし、黒人奴隷を頂点とする労働力の蓄積によって、その生産を高めていった。もちろん南北戦争後は、奴隷制度は法的に消滅したものの、南部における黒人の問題は、今なおその残渣が消えていない。これに対して、北部は小農形態をとりつつ、食糧生産を中心として、南部はもとより都市への食糧供給基地として発達し、19世紀後半には、この食糧も輸出産業として発展してきた。

先に述べたように、農業発展の原動力はヨーロッパの資本主義であり、さらにアメリカ

自身の工業の発達に伴い、その方面に対しては供給せねばならないようになった。さらに重要なことは、鉄道建設の意義を忘れてはならない。かさ高で、腐敗性の農産物は、いかに肥沃で広大な地域で生産されても、安価、大量、迅速な輸送手段を欠く限り、市場性を持ちえない。この隘路は1850年以降、鉄道ブームにより漸次解消されていく。このような推移は、移民の流入と人口の西漸を促し、19世紀半ばの10年毎に、総人口の1割、すなわち5百万人の移民の流入が記録されている。例えば、1870年の有業人口の農業就業人口の比率は、53%と当時のアメリカの最大の生産産業といえる。当時は馬耕農業であり、広大な耕地に対し、大きな人力を必要とせざるをえなかった。しかし逐次機械化農業が導入され、1910年には、それが31%、1950年には12.5%、現在は僅かに4%で世界屈指の農業を支えている。もとよりこの広大な国土は、気象、地質的条件により可耕地は、自ら選択されるかも知れないが、この国の科学的農業というものは、今これを克服している。

アメリカ全土のうち放牧林地を含めて75%、すなわち75%は耕作農業と畜産に利用されている。(第1図)これに対し日本では、耕作地

第1図 土地の主要用途



* 牧草地のみに利用される作付地を含む

○ 荒地、沼地、砂丘地、その他

+ 農場建物用地、ハイウェイ、鉄道、都市地域、公園、その他

△ 公園の森林地、およびその他の保存地帯を除外する。

出所：U. S. Department of Agriculture.

13.5%、果樹1.6%、牧草地2.6%、合計17.7%とその比率は極めて少ない。しかもアメリカ

カでは生産的土壌は、非常に豊かで、作付可能な6千6百万エーカーは牧草地として保留されている。また重要なことは収穫される作付総面積のうち約60%は家畜用飼料の供給のため利用されていることである。土地利用に関する限り、まさに家畜王国であり、来るべき数世紀にわたって飢餓の心配は全然ない。同様のことは1昨年ブラジルを訪れたとき聞いたが、同国を開拓すれば現在人口1億を数えられるが、その7倍を養うだけの余裕があるといっていたのによく似ている。

以上アメリカの農業の歴史的背景について簡単に述べたが、このおぼろげながらの認識をもって農村を廻ってみた。この農村はすべて大学や知人に依頼して、紹介してもらった。しかしどれも巨大農場で、アメリカ農業の表面に触れただけで、小規模農業の実態をつかめえなかったのが残念である。

1. フレドニア

ここはバッファロー市より車で約1時間、五大湖の一つエリー湖の近くにある純農村であるが、一方学園都市でもある。人口1万6千で、大学の学生数5千、教職員と家族を含めると1万位になるかも知れない。だからこの農村の人口は6千位のものであろう。全く平地で、有名な葡萄酒の産地である。見渡す限りの葡萄畑で、枝にはたわわに黒紫色の房が垂れている。ここの農家であるアルドレヒ氏の宅を訪れた。氏の農場は葡萄以外にも牧草、トモロコシ、甜菜なども栽培している。その他に乳牛を150頭程飼育している多角経営ともいえる。畜舎をみせてもらったが飼料を与えるにしても、排泄物の清掃にしても自動化、搾乳ももちろん機械化で、消毒、分離も一貫作業、このミルクでアイスクリームの製造まで行っている。果汁を混合してバック詰めの商品まで見せてくれた。この家はレストラン、マーケットも経営し、アメリカでは中農の部類に入る位であろう。耕作面

積は50エーカー（20万㎡）であるが、氏の言によれば、アメリカでは耕地を25～30エーカー（10万～12万㎡）なければ専業農家として成り立たないといっていた。使用人は30数名で、農場の管理、乳牛の世話、乳製品の製造、食堂、売店の仕事に従事している。これら従業員の給与は、週給800ドル（16万円）、月70万円前後で、その他の手当はないもののかなり高給のように思える。それでも賃上げ攻勢が続いて困っていると嘆いていた。

この地方が、銘柄のいい葡萄酒の産地である理由は、土壌もさることながら気象条件がいい。アメリカ東北部で、極めて厳しい寒気が例年襲来するが、春になると五大湖から水蒸気が昇る。それが地をはって畑を潤す。それが美味な葡萄生育に最もいい条件のようである。この自慢を聞きながら、もう一つ問いかけた。「しかしこの広大な畑の葡萄を手でとっていたら相当の労働力が必要ではないだろうか」「これは振動機で、熟した実をふるい落してから集めるからたいしたことはない」との答えである。なおアメリカでは葡萄酒製造にかなり高率の酒税がかかるが、この地方では自家用ワインとして、葡萄酒2百ガロン（約750立）まで無税、つまり一升ビン420本余りは無税で自家醸造も認められている。



第2図 アルドレヒ氏夫妻

アルドレヒ氏夫妻は「日本から折角来たのだからわれわれの家に来てほしい。アメリカの農家はどのようなものか参考のため見てほしい」とのことで、できたてのアイス

クリームのご馳走もあり、案内してもらう。森の中の住宅で、しょうやかな木造平家建てで10部屋位ある。日常生活以外にサロン、事務室、庭にはプールも具えていて優雅な生活のように見える。また成人した息子も3名、父親とともに農場経営にたずさわっている。日本では青年が農村離れの傾向があるが、アメリカでは、家族経営が農業基盤の拡大につながっているようで感慨深いものがあった。

ここで一つ付け加えたいのは、住宅をとりまく樹木は、ほとんど楓である。この地方からカナダにかけて楓が多くみられる。カナダは、この樹が多いためか、カナダの国旗の紋章は楓である。秋も深くなると、その葉は深紅に映える。この楓からシロップが作られる。メープル・シロップといい、香高く、甘味が強い。私はこれを知らなかったが、丁度ゴムの樹の幹に傷をつけて樹液をとると同様の方法で樹液から精製する。初めて味わい、その採取方法など聞き、新しい知識を植えつけられた。

2. デンバー

コロラド州の州都、デンバーでは、玉井好孝師のお世話になり3日間滞在した。師は滞米48年、アメリカ国籍をもち76才で、今なおかくしゃくとして真宗の布教に努められており、デンバーの中心地に地上12階のビルも所有しておられる。富山県井波町の出身で、私にはこのビルの一室をあてがわれた。

このビルの一階は仏堂と体育館、それにスーパー・マーケット、レストラン(日本料亭)など、2階以上はアパート、12階は主として教養などのための日系の人々の集会室として使用されている。コロラド州は日系の人々が特に多く住みついている。これには理由がある。第2次大戦と同時に日系のアメリカ人は、西部各州に強制収容されたことは承知されていると思う。政府の指示によったもので、各州とも難色を示し、日系人の収容を拒否した

が、結局僻遠の荒蕪地に、あるいは砂漠のただ中に有刺鉄線にさえぎられて集団隔離され、衣食住も最低の境遇で終戦まで続いていた。そのなかでカール・コロラド州知事だけは、西部諸州の拒否にかかわらず、私は人道的の立場で引き受けようとて、多数の日系人が送られてきた。知事はこれを暖かく迎え、できるだけ自由を与え、衣食住にも決して苛酷な待遇をしなかった。玉井師は、名目は収容でも宗教活動は自由にできたと、私に語ってくれた。日系の人達は、今でもカール知事の徳を讃え、玉井会館の前庭には、その胸像が建立され、私は深い感銘を受けた。

私の到着の翌日は彼岸の法要が仏堂で行われ参列した。200名近い信徒の参集で、お経は私の幼い頃覚えた正信偈らしかったが、法話は英語で、残念ながら私には理解しなかつた。会衆のうちには外人も10数名みられ、師の感化が今更ながら身にしみ、かつ宗教というものが、国境を越えて人の心をとらえるかを感じとらせる。玉井師の檀家(西本願寺派)は800世帯で、遠く隣の州まで及んでいる。師の布教はその本来の活動はあるものの、行事はその他に案外結婚式が多く、日程表によってそのことを知りえた。このことから日系の人々は、結婚の儀式をほとんど仏式によるらしく、神式の多い日本とは大きな相違である。数年前「アメリカ合衆国 玉井好孝」として勲4等に叙せられていることを付け加えておく。

さて玉井師にお願いしてあった農場見学であるが、ここから約40分車を走らせて、タナカ農場に向う。多少の起伏があるが、平坦な田園風景である。各種の穀類(主として小麦)や野菜、甜菜などの畑が続く。西はロッキー山系で、9月半ばというに、すでに冠雪の峰々が望見できる。東は、果てしない平原で、地平線がかすかに浮ぶ。ここで不思議な光景が眼に入る。耕地のなかで所々に櫓が立っている。恐らく水利のポンプアップだろうと思

い「ロッキーに雪があれだけあり、溪谷を通じて、多量の水があると思っているのにまだ水が足りないか」と聞くときにあらず、「あれは石油の汲み上げ井戸である」と。私は不勉強でコロラド州でも石油がとれることを知らず、恥ずかしい思いをする。それにつけても古い記憶を呼び起こす。ニクソン時代「子孫に美田を残す」ことを合言葉に、この国は石油地下資源を有するものの、できるだけ輸入でまかない、中近東をはじめとする石油資源の枯渇したとき初めてこの地下資源を利用する。すなわち将来のため、地下資源を子孫のために温存する政策がとられていると聞いた。この畑の中の油井をみつめつつ、広い国土の地下資源を羨ましいと思いつつながら彼らの心根は、我々日本人には理解し兼ねる。

さて着いたのはタナカ農場である。その所有面積は3千エーカー（1千2百万㎡）、日本の耕地をみている私には天文学的数値である。タナカ氏は日系2世。30年前の戦後、80エーカー（32万㎡）を10万ドル（2千万円）で土地を買入れて農場経営を始め、拡張に拡張を重ね、3千エーカーに達し、コロラド州でも有数のものの一つに数えられている。多角農業で兄弟4名の株式組織ということである。珍しかったのはバッファロー（野牛）の牧場で、西部劇ではみられるが、群をなすバッファローは初めてである。タナカ氏は獐猛だから近寄るなといわれたので遠くから眺めるだけに止めた。何なら、昼食に食べてみないかといわれたが、肉は硬く、やや臭みがあるとのことで敬遠した。ただこのバッファローは飼料をやらなくてすむのでいいらしい。

私はキャベツと玉ねぎの農場を見せてもらった。見た目にはそれぞれ数万坪の同種類のもの栽培で、水利はいいが、この広い耕作地に総てゆきわたらないのだろうか、サイフォンで水を導入していた。丁度玉ねぎの掘り起こし時期で、トラクターが動かされているが、玉ねぎは多数の労働者によって拾い集め

られる。ちなみにここの使用労働者は350名位、主としてメキシコの季節労働者で、週給200ドル（4万円）、月額16万円位、その他にインディアンも雇い入れているが、労働させるとき別々の耕作地でやらせる。メキシコの労働者はシカノと呼ばれている。

集荷場と機械工場をも見せられた。これだけの大農場だから広大なものである。トウモロコシ（食料用）の選別をしていたが、大き



第3図 「とうもろこし」の選別場
メキシコの収穫労働者

なベルトコンベアーに乗って、約30名ばかりで仕分けし、梱包されてトラックに積みこまれる。機械工場も整備されて機械の修理に当たる。所有しているのはトラック50台、トレーラー70台、コンバイン80台、ワーゴン40台、大企業であり、ガソリンその他の石油類のスタンドまでである。集荷された農産物は、直ちにトラックで数百キロ、数千キロを各市場に送りこむ。タナカ氏は、この農業でミリオンネヤーになりたいというのが多年の念願であった。彼の現在の農産物収入は150万ドル（3億円）であり、この農産物収入はミリオンか、

または利益がミリオンか残念ながら聞きもらした。なお労働賃金は、東北部のフレドニヤでは、週給800ドル（白人労働者）、ここでは200ドル（シカノ）、こんな大きな懸隔がある。これもアメリカの労働者の本当の姿かも知れない。

アメリカの大農業の実態を見学して、日本の集約農業に想いをいたすとき、はかない気持ちはないでもなかったが、一つの経験として得る所が大であった。またこの農場には北海道から3名の青年が、実習生として勉強しておったことも付け加えておく。

3. カリフォルニア大学農学部

ランチョー・ロス・アミゴス・リハビリセンターで研究しているY君に依頼して、農村を見せてもらうことにしてあった。その積りでどこか適当な農村と思っていたが、カリフォルニア大学農学部実験農場に連れてゆかれた。案内は、日系の農場経営者で、ロスアンジェルスで大きな野菜、果実のマーケットをやっている人である。

ロスアンジェルスからサンジェゴにかけてのカリフォルニアの南部は、もともと砂漠地帯が多く、農産物栽培には適していなかった。しかし灌漑の技術が発達して生鮮野菜がとれるようになると急激に人口が増加してきて、ロスアンジェルスの如きは、シカゴを抜いてアメリカ第2の大都市となった。その重要な原因となるものはフーバーダムの建設である。1931年起工、1936年完工、コロラド河をせき止め、ダム堤長 390m、高さ 221m、ロスアンジェルスまで 500キロあるが、コロラド河流域の砂漠地帯はもとより、南部カリフォルニアを灌漑し、アメリカにおける農産物の主要供給地の一つになっている。

実験農場に赴く途中、案内してくれた日系のI氏の農場も眺めながら通るとオレンジ畑が続く。もう積み取りも終わったので、その梢にまばらに黄色の果実があるのみ。話を聞

いていると生産過剰で価格がどんどん低下する。商売にならない。郊外は人口の膨張で、住宅建設が盛んなので、オレンジ畑を住宅地に売り払っているが、所々にもっているオレンジ畑を他の作物に転換している。ここの畑は日本のような丘陵地の段々畑でなく平坦地で、その樹も7~10mもあるので、収量もかなり多いように思われる。ここで特に眼につくのはスプリンクラーである。大規模のものは山林に太いパイプを通し、分岐させて地上を潤している。しかしこれも人口稠密地域の山林に特有なものかもしれない。

実験農場では、わざわざウィリアムス教授が説明にきてくれた。イチゴの栽培である。今、苗を植え終わった所で、広い農場にはスプリンクラーから縦横に水を散らしている。よく話を聞くと、カリフォルニアのオレンジは生産過剰でもう斜陽農産物であり、最近ではイチゴに転換している。同教授は先頃まで、静岡に滞在し、イチゴ栽培の研究をしていたそうであり、その技術を導入したいと、なかなか意慾的なようにみられる。ここで珍しかったのは、霜防除機であり、このインディアンサマーの酷暑のなかで案内されてまさかと思ったが、霜害で農産物の壊滅もある。その実験装置では、電柱ほどの高さに大きなプロペラを付けたもので、霜がくればこれを廻して払いのける。実に単純なものようだが、この広大な地域で実効があるかどうか、私には判断しにくい。このロスアンジェルスは、北緯34度、大体金沢位の緯度だから、気象的には、あるいは霜害の発生も起こりうるだろう。話は別になるが数年前、ブラジルのコーヒー園で、南風によって霜害が起こり、コーヒー樹が全滅し、世界的にコーヒーの値の高騰をみたのは、私どもの記憶に新しい。農場の各所を見せてもらったが、栽培種類は多く、しかも比較的小規模で、学問的には興味があると考えられるものの私のような専門外のものには、余り参考にならなかった。

とにかく西部開拓はゴールドラッシュに端を発する。1848年、カリフォルニア州に金鉱が発見され、世界中を興奮させた。黄金熱に浮かされた人々はアメリカ東部からばかりでなく、全世界から集まった。ある記録によると「人びとは、その土地を走り回って、あっちこっちと地上の金を拾い上げている。まるで森の中に解き放された千匹の豚が落花生をほじくり出しているように」と書いてある。ゴールドラッシュによる人口の急増、さらに大陸横断鉄道の完成（1869年）はアメリカにおける食糧基地として発達したといつてよい。何分にもその面積は41万km²で日本に匹敵する。ここはわが国の1/5位の人口である。南部は砂漠地帯が多いが、農業技術、とくに灌漑技術によって農業生産基地化したが、それでも私のみた範囲では、至便と思われるフリー・ウエーに沿って、広漠たる荒蕪地あるいは砂漠が残されている。

顧みて、日本の農業を思うとき感慨一入のものがあった。

アメリカこぼればなし

1. 大陸一人旅

今まで数次にわたり各国を旅行したが、これは少なくとも2、3人連れだっていて、外国語に堪能な人もいたので安心して旅を続けられた。この度はソルト・レーク・シティで、日本の仲間と合流するまで一人旅。私どもの若い頃は戦争と戦後の窮乏と混乱で、とても外国に出向く余裕などはなかった。だからめったに外国人と話を交える機会がなく、今でも彼等の訪問を受けると身のちぢまる思いがする。だから話の始めに「My English is very poor.」と前おきする。

さてサンフランシスコよりバッファローに向かう。空港の出発時刻掲示にはバッファロー行きとなっているので、乗ってしまえばバッファローまで連れて行ってくれる。向こうへ着けば、友人や知り合いが出迎えてくれる

からと、ゆうゆう腰を落ちつかせる。ところが、予定到着時刻より約1時間半前に着陸した。デトロイトである。サンフランシスコでは、その掲示にデトロイト経由とはでており、ここでもお客を乗せるのかなと思っていた。しかし乗客はぞろぞろと皆降りてしまう。とうとう私一人。スチュワーデスが私の所へ来て降りよという。私はバッファローまで行くのだから、このフライトはバッファロー行きだからいいのではないかと反問する。しかしどうもここで乗り換えろと言っているらしい。そのうち一人の黒人の若い女性をつれてきて「この日本人は、バッファローに行くのだが、貴女もバッファロー行きだから一緒に連れて行ってほしい」といっている。幸いにこの若い女性は、私の荷物をもってくれ、他のフライトに乗り換えて、バッファローまで隣に坐らせられ、無事バッファローへ安着というお粗末な一幕。そういえばデトロイトに着く前、スチュワーデスが、何やらベラベラ放送していたが、騒音と早口で、何をいっているのか判らなかつたが、恐らく乗換えのアナウンスだったのであろう。

向こうへ着いて親しいアメリカの友人にこの話をしたところ、「我々でも国内を旅行しても時々言葉がわからないことがある。何分にも広い国だから、各地になまり（方言）がある。君の判らなかつたのは当たり前だ」と慰めてくれた。日本でも津軽弁と薩摩弁とあるように、その国のなかでもチンプンカンプンのことがあるように、友人の言葉を聞いていささか心のゆとりをもったわけである。

2. 山 火 事

一昨年メキシコ・シティからバンクーバーまで飛んだ。空路はシエラネバダ、ロッキーの上空である。窓から見おろすと、所々に煙が立ちのぼっている。スチュワーデスに聞くと山火事だという。日本で山火事といえば、先ず火の不仕末である。しかしこの人跡未踏

ともいえる大密林の火事は、ほとんど自然発火といわれる。樹木が触れ合って熱を呼ぶ、それが発火して火災をひき起こす。思い起こすのは30数年前、赤道直下の太平洋の孤島に取り残され、米軍の砲爆下にひそんでいた頃である。マッチがない、レンズがない。火は生活の糧である。ここで経験したのは火種を作るわざである。パンの木を乾燥させ、舟ぞこ型に作った凹みに、これもパンの木の棒でこする。約5分間位で熱して煙をあげる。そこへ椰子の実の乾いた繊維を入れると燃え上がってくる。火種である。つまり原始時代にかえった生活を強いられていた。山林の自然発火もそのたぐいだろう。

デンバーの西方はロッキーの山脈が連なる。遙かに大きな煙がたちのぼっている。私は、ボルダー大学を訪れたとき、大学の教授にあれは何かと聞くと、山火事だという。あんな深い山では、消防隊も苦勞するだろうという、ほっておくと答える。民家の近くに及ばない限り、自然鎮火にまかす。実にもったいない話だが、彼のいうには、この大自然に摂理がある。あの山の樹々が焼きはらわれれば何年、何十年あとには、再びその地に適応した樹々が生育し、再び緑がかえってくる。狭い国土にさいなまれながら生きている日本人的感觉ではとらえにくい。こんな問答のうちにオーバーリンの生命の起原を想起する。30億年前、地球上に初めて生物が現われ、単純な生命現象を営みながら、生物の進化が進んできた。遺伝子は宇宙線の影響、あるいは地球上の環境の変化により、変異に変異を重ねて、生存か、滅亡かの淘汰に淘汰をくりかえし、現在のあらゆる生物の姿となり、地球上に分布している。自然の摂理、いわば輪廻は未来に向かって生物のある限り続けられるだろう。この教授の言葉も何だか判ったような気がする。わが国では開発によって緑が消滅するといって反対するいわゆる自然保護団体の感覚とこのアメリカ人の感覚に大きな相違のあること

を見せつけられた。

3. こじき

幼い頃、お祭りの参道で群をなすこじきが今なお記憶に残っている。しかし、これは現在見ることができない。これもデンバーでお世話になった玉井好孝師から「貴方がたはアメリカへ来ても表ばかり見て、アメリカの姿だと思って帰られる。その裏側是一般の旅行者は見していない。今日はその方面もとくと見てゆかれる方がいいでしょう」とのことである。実際諸外国を廻っても、学術方面の仕事で、半ば公の資格であったので、案内してくれる所は、最もいい所ばかりで、本当のその国の姿を見逃していた。

ある早朝、ダウンタウンに出向いた。驚いたことには、その街路は乱雑で、きたないことである。家屋は高層でなく、商店が連なっている。とくにどの商店も太い鉄格子でさえぎられた飾り窓である。路上は昨夜飲んだであろう酒ビンが無数に散らばっている。それも粉々にたたき割られている。一寸軒下をみればボロを頭からかむって浮浪者らしいのが横たわり、足音に気づいて頭をもたげる。それがやおら立ち上がり、私どもによりそいながら話しかける。何かを玉井師に言っているが、この朝のパンとスープをあがなう金がな



第4図 玉井好孝師と「こじき」

いから、金をくれというので、まことにしつこくまとわりつく。いつもの習慣でもあろうか、ポケットから1ドル紙幣を渡している。

少し歩くとまた他のものがまとわりつく。この連中の顔をみていると東洋系のような気がする。浮浪者はメキシコ人が多いらしい。中西部一帯は古い時期、スペイン植民地でメキシコ人が多い。地名のロスアンジェルスにしても、サンペドロ、サンジェゴにしてもスペイン語からきている。西部劇でよくでるリオ・グランデの砦のリオはスペイン語の川の意である。このコロラドも西部開拓とともに1876年、合衆国に併合され、州の独立した所である。

この浮浪者たちも 100年以上も前からのこの地を居住とした郷愁が、生きたいという現実だけ、われわれの袖にまといつのでなからうか。私ども一般旅行者は、アメリカの大都市の華やかさに眼を奪われ、この裏側のアメリカを素通りしてしまう。かつて東南アジア、インド、パキスタンなどで、物乞いするものを多数見ている。ことにボンベイでは、群をなした子供のこじきに道をはばまれた苦い経験がある。世界一の繁栄と富を誇るアメリカの一都市で、この裏側の生態は、私の記憶に残る思い出である。

4. 9月半ばに雪に遭う

“This is the Plase” という言葉はヤングが1847年、ソルト・レーク平原に着いたとき「ここぞわが神の寺院を建造すべき土地である」といったと伝えられている。ニューヨーク州でプロテスタントから分派し、幻、神癒を信じ、聖書の他モルモン経を聖典とする。このモルモン教の創始者ジョセフ・スミスはその狂信的行動により1845年殺害されている。その後継者であるブリガム・ヤングは、プロテスタントの迫害を逃れ、飢餓と寒冷にさらされ東部より西部へ、多数の信徒を引き連れ、3年間の苦闘の末、ロッキーを越えて、あの丘に立ち眼下にひろがる大平原を望み、我が神の地をここに求めたのである。多数の犠牲者を出しながらも 148名の信者はここに

安住の地を求めたのである。信徒は、全世界に 400万といわれている。特異なことは、信者は永い間一夫多妻主義で、地位、社会的力量により妻の数も異なるといわれ、ヤングも 27人の妻をようし、そのうち19人の妻から 56人の子供をもったと伝えられている。しかしアメリカの法律により現在はその慣習はない。この荒蕪の砂漠地帯にヤングの才幹と統率力により灌漑農業により馬鈴薯栽培に成功し、モルモン教の大本山を建立するに至った。そ



第5図 モルモン教大本山
(ソルト・レーク・シティ)

の後のゴールドラッシュ、そのための食糧確保も近代的灌漑法の確立により成功し、その子孫によって、工業、鉱業および商業に輝かしい成果をあげた。ソルト・レーク・シティは人口20万、その8割はモルモン教の信者である。もう一つ忘れてはならないのは、大陸横断鉄道である。1869年、東（ユニオン・パシフィック）と西（セントラル・パシフィック）から延びてきた線路の最後のレールの犬釘が打ちこまれたのが、ソルト・レーク・シティの北、ユタ州プロモントリーで、

その記念すべき黄金の犬釘は州政府に大陸横断鉄道貫通の記念として後世に伝えられている。

所で9月18日、私の到着の夜半から積雪があり、北緯42度、高度1,500mのこの地で思いもよらない寒さにふるえ上がらしめた。ロッキーとシエラネバタ山系にはさまれた盆地である。かつてウラル山麓のオルスクで9月半ばに雪の経験があるが、まさかと思うアメリカの中部である。仕方なく街の衣料店へセーターを求めに出る。品物を選んでみたが、どれも、これも韓国、香港、台湾製である。日本製品は見あたらない。世界の王座を誇った日本繊維製品の凋落である。幸いイギリス製品があったので、少し値段がはったが買い求めざるをえなかった。

ここで頭に浮んだのは寒さだけでなく、今述べた日本の繊維産業である。優秀なブランドを輸出、これに発展途上で改良が加えられ、安い賃金の労働力で、これには太刀打ちできない。外国の市場は彼らにおさえられる。近い将来、インド、インドネシアが最大の供給地になると、私の友人のある繊維業者は嘆いていた。アメリカのような大工業国でも太刀打ちできないから彼等に市場をゆずらねばならないことは、この衣料品店で頭の中に深く感じとった。このことは、あらゆる産業についてもいえることだろうが、日本にとっても例外ではない。

各国を廻ってみて、日本程豊かで、自由な国は、極めて少ない。いつまでこの繁栄に酔い続けられているか、危ぐの念を抱くものは私のみではあるまい。9月半ばの雪を題材として、モルモン教、雪、衣料品と三題話めいたが、ソルト・レーク・シティ滞在中の一齣である。

5. ガレッチェ セール

一応は人種差別はないことになっているが、それでも白人優位の思想は根強く残っている。

ロスアンジェルス病院を訪問したとき、職員に余りにも黒人が多いので、案内してくれたN君にたまただした。彼のいうにはここの市長は黒人で、人種差別を厳に戒めて、平等の原則を実施しているそうである。しかしそれは表面的のことで、底流はそうでもないらしい。例えば住宅の隣に黒人が引っ越してくると、隣近所の土地や家屋の価格が急落する。このダウンタウンには黒人の居住地域が多い。それで白人は郊外に住いを求めて移動する。いわゆる大都市のドーナツ現象はここでも見られ、住宅地帯は、閑静で緑の樹々に包まれている。広い道路に加えて、住宅の前庭には芝生の緑がはえる。市民のいこいの場としては快適である。

滞在中、住宅地帯を通り過ぎてみた。日曜日である。不思議な情景が眼につく。それは芝生の前庭に机を並べ、傍に自転車や乳母車、机上にはオモチャや書籍、その他細々とした雑貨類が所せましと置いてある。思いなしか、天気がいいので家具類の虫干し位にしか考えられない。これが道路の脇に処々に眼に入る。余り変わった風景でN君に聞いてみた。あれはガレッチェ・セールといって、日曜日にその家の不要品を道行く人に買ってもらう。一寸立ち寄ってみると、成程使い古した品々である。日本では捨て所に困る品々も相当ある。しかし感心させられたのは、使えるものは使えるまで使う。この精神はアメリカの人々に根強いらしい。「消費拡大」、これはわが国の政策であり、経済成長のうらはらで、判らないでもないが、日本人は物に対する価値感が、最近とくに薄れてしまっているように思う。

1つの例だが、かつて西ドイツのレーゲンスブルグ大学を訪問したとき、そこの教授に乗せてもらった車が余りにもくたびれていたもので、何年位この車を使っているのかと問うたが、このフォードは13年乗っているものの、まだ結構間にあうといっていたことを思い出

す。私は車の運転の経験はないが、日本では2、3年で換えるのが普通のように、運転に支障がなければ、そうまでしなくてもいいように思われる。

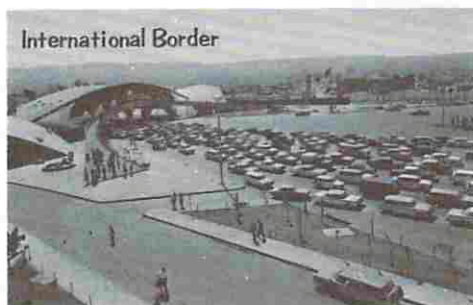
ガレッチ・セールという言葉は初めて耳にしたが、もともとは車のガレッチに不要の品を並べて、道行く人々が適当の値段をきめて、商談で合意ができれば成立という仕組みである。アメリカ人の合理性と市民の物に対する感覚は、このガレッチ・セールからもうかがえた。また付け加えるならば家屋の値段である。都市近郊の住宅地を廻ってみると中流の家庭で敷地が300~500坪位に見える。方々で招かれたり、訪問したりして、失礼と思ったが、土地や家屋の価格を聞いてみた。向こうでは車は人の足である。大都市といえども買物に不便はない所である。ドルを200円に換算すると1坪1万円位である。住宅に入ってみるとロビーは少なくとも10坪位はある。これが生活の場で、その他に3ないし4部屋がある。土地に余裕があるから平家が多い。それで建築費は1,000万円位。ただ家を借りた場合は、思ったより高く月10万円位とられるという。なお家屋の売買は頻繁で、街を歩いてみると売り家の看板がやけに多い。これは日本と違う所で、これこそ日本の自動車の買い換えとよく似ている。ただし家の売買は、家屋の値段だけで、土地はタダ同然と聞かされ、日本の土地のことを思うと実に羨ましい限りといえる。移転する場合、ムービング・セールといって、ガレッチ・セールと同様に不要品の売り払いがあるそうで、これについては見る機会がなかった。

とにかく、日曜日のガレッチ・セール、アメリカに滞在している人達には見慣れた風景かも知れないが、行きずりのエトランゼたる私には、興味深い印象であった。

6. インター・ナショナル・ボーダー

国境線 (International Border)、日本の

ような島国ではなじまない。ことに旅行者は航空機利用で空から国境線を通り過ぎてしまう。



第6図 インターナショナル・ボーダー
(アメリカ側)

私は、ロスアンジェルス滞在中、アメリカだけの査証でメキシコ国境の街チュアナに行けると聞いて、サンジェゴから国境を越えた。いとも簡単に、パスポートも調べることもなく廻転ドアをまわせばメキシコ領である。ただメキシコからアメリカへ入国するとき、パスポート、荷物の検査がある。そこで不思議な光景が眼に入る。私どもの通路と別の門戸に40人位の連中が、ポリスにひきいられて押しこまれるようにメキシコ領に出されている。聞いてみると密入国者の強制送還である。9月末とはいえインディアンサマーといわれる35℃を越す連日の酷暑、ほこりにまみれ、ポロ服を身にまとったメキシコ人が国境線を屠所の羊の如く押しこまれて行く。生気もない。この附近の国境線は有刺鉄線の金網で区切られ、丘陵地帯を視界のとどく限り続いている。これが全国境線3千キロは到底続いているとは思えない。カリフォルニアからテキサスに至る境界は、その大部分不毛に近い荒蕪地か砂漠である。入ろうと思えば、何処からでも入りこめる。そもそも西部は、スペインの勢力下にあつて、メキシコ人、インディアンが永い間生活を営んでいたが、米西戦争の結果、カリフォルニアなどアメリカに割譲されたのは1850年である。このため何世紀もの間、メキシコの血が濃く、たとえば地名にしてもスペイン語系統の名称が多い。しか

も現在アメリカとメキシコでは生活程度格差に雲泥の差がある。従って農場労働者や肉體労働者はメキシコから流入されている。経営者にとっては低賃金のメキシコ人は便利であるにちがいない。しかし州政府の職業安定所は、常にこれらの労働者に眼を光らせ、1カ月に1回位パスポートの調査に廻っている。もし不法入国が見つければ立所に強制送還の憂き目を見る。失業者の増大が大きな政治課題になっているこの国で、外国人労働者を多数雇用していることは、どうも割り切れないが、矢張り賃金の格差が大きな原因であろう。

私は、国境線でみた強制送還の絵図は初めての経験で、私の思い出に永く残るだろう。

7. 物価について

金沢の姉妹都市バッファローの都市提携委員会の招待をうけた。フライヤー委員長のいうには「日本は牛肉は非常に高いそうだからアメリカにいるうちにたらふく食べて帰ってほしい。」出されたのはワラジ大のビーフステーキである。たしかに有難いが、折角のごちそうも半分平らげるのにやっとだった。とにかく円高ドル安で、自分のふところ勘定で食料品が安くみえて仕方がなかった。日本からの観光客が激増するのは無理がない。黒部西瓜が800円位、メロンは80~100円、カリフ



第7図 この西瓜 800円

ォルニアオレンジは30~40円（日本では輸入もので350円）、米は $\frac{1}{2}$ 、牛肉は $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{10}$ 、ホテルの朝食は300円、夕食はビール1本つけて、

1,000円前後、宿泊費はモーター、これは日本の中級ホテル並み、これが2,000円、一寸考えられない安さである。それでもアメリカはインフレが続いているという。わが国は、アメリカに次いで国民所得が多いといわれているが、生活必需品が高ければ、見かけだけの高収入であろう。物価上昇におされての所得増大か、所得増大におされての物価上昇か、この経済の仕組みは私には判断しかねる。ただ日本は、他の先進国に比べて所得の税率は23%内外で、低率であることは確かである。しかし国民生活を安定させる最も重要なものは衣食住で、これに対する政治的配慮である。共産圏では、私の見た限りでは所得水準は低く、文化的生活には程遠いと思われるものの、衣はともかく、食住に対して格別の配慮を行い、人心の安定に努めている。

とにかく今度のアメリカ旅行を通じて、円高ドル安の実態を身をもって読みとり、日本の物価とにらみ合わせ、時に腹立たしい気持ちに襲われることが少なくなかったことを記して、アメリカ再訪記を終わることとする。

なお今回のアメリカ出張に際し、富山県厚生連よりご援助をいただき、また関係の皆さんのご厚意に対し、深甚な謝意を表する。

参 考 文 献

- 鶴谷 寿：アメリカ西部開拓と日本人、NHKブックス、日本放送出版社 1977
ジェームス・トレイジャー著、坂下昇訳：穀物戦争、アメリカの「食糧の傘の内幕」東洋経済新報社 1975
日本航空株式会社：アメリカ西部の旅、実業の日本社 1977
大内 力：アメリカ農業論 東京大学出版会 1965
ベネデイクト著、山口辰一郎監修：アメリカ農業政策史 1958
ヒグビー著、田口陽一訳：アメリカの農業、農林水産業生産性向上会議 1961
馬場宏二：アメリカ農業問題の発生 東京大学出版会 1969